■ 研究論文

近代詩人萩原朔太郎の撮影した写真が捉えた風景要素に関する検討

A Study on the Factors of Landscape in the Photographs by the Modern Poetry Sakutaro Hagiwara

塚田 伸也* 森田 哲夫** 湯沢 昭*** 橋本 隆**** 関屋夕紀子*****
入澤 寛**

Shinya TSUKADA Tetsuo MORITA Akira YUZAWA Takashi HASHIMOTO
Yukiko SEKIYA Kaku IRISAWA

Abstract : The purpose of this study is to clarify the characteristics of landscape in the great modern poetry Sakutaro HAGIWARA by analyzed his photographs and his poems. The main conclusions were as follows; (1) The scenery of his original photographs had proposed two points of view; “the photographs of the place where Maebashi-City and Kamakura were material of landscape which was esteemed”, “the photographs of the place in Tokyo and Osaka were the human activity and the townscape”. (2) The element of landscape by his photographs could be divided into 6th groups scene of “1 group of the wheels and the activity”, “2 group of the animals”, “3 group of the station and the stones”, “4 group of the street, the sky, the tree, the building the institution and man”, “5 group of the trees, the land and mountain”, “6 group of the water, the shore and the bridge”. (3) The poetic word was compared with the word analyzed by the qualification theory of 3. It became clear that the words of all the landscape elements appeared as a poetic words. As a result, it is possible for research on his poetry to regard the spatial characteristic and the photographs.

Keywords : Factor, Landscape, Modern poet, Sakutaro Hagiwara, Photograph

キーワード : 要素, 風景, 近代詩, 萩原朔太郎, 写真

1. はじめに

風景は、人にかかわりなくあるものではなく、人のあり方に応じてさまざまな形で現れるものである。風景の構図は、人の視点のわずかな揺らぎに応じて一変するものである。また、風景を語る言葉によっても見えるものが異なるため、同一の構図であっても万人が同じ風景を体験できる訳でない。さらに、風景の味わいや気配は人の好みや想像力に頼るところが大きいとされる。

風景は、このように人の主観に強く依存して現れるものであるが、都市や村の成り立ちや自然条件と全く無関係ではない。人の住む場所の地理的構造や歴史は風景そのものではないが、風景の母胎であるからである¹⁾。

この風景の母胎となる都市や村の成り立ちや自然条件を視覚的に捉えたものとして風景写真がある。風景写真は、特定の場所から見た一定の範囲をシーンとして固定した景観表現であり、シーンとして捉えて操作する構図論が成立する。篠原は、操作論的な立場から景観構成要素の位置づけを明確にするため、視点、主対象、視点場、対象場の概念を示している²⁾。

風景写真を扱った最近の既往研究としては、観光客が撮影した写真を用いて観光行動と観光対象としての集落風景を評価した羽生らの研究³⁾、居住者が撮影した写真を用いて農村の地形特性から捉えた青野らの風景嗜好の研究⁴⁾、天竜川の沿川における新旧の写真集を用いて景観の変容を検討した平岡の研究⁵⁾があるが、これらの研究はある特定の撮影者に着目して行った研究でない。

風景に関する文学作品や絵画表現は、人間の風景観を把握する上で有力なデータであり、人間の感情フィルターを通じて認識された心象空間ともいえる。このため背景となった社会情勢や基本的思潮を踏まえて研究が行われている^{6), 7)}。文学作品や絵画表現に着目して行った先行研究としては、夏目漱石の作品中に見る庭園観を考察した神田らの研究⁸⁾、江戸後期の図絵集に描かれた

瀬戸内海の風景、明治期の豪溪と寒霞溪との漢文学の関係に着目した西田の研究⁹⁾、和歌や俳句などの文学作品や絵画作品における柿の風景としての表現を分析した工藤らの研究¹⁰⁾があるが、近代詩と風景との関係について扱った研究は少ない。詩は作者の内面的な感情を、圧縮した形で直接的に表現した文学作品の1つであることから、大きな想像力を掻き立てる風景の表現が存在すると考える。

そこで、本研究では、わが国の近代詩に大きな影響を与えた詩人である萩原朔太郎に着目し、彼の撮影した写真と、作品（詩）との関係について研究を行う。萩原朔太郎は、自らの撮影した写真について、「元來、僕が寫眞機を持ってゐるのは、記録寫眞のメモリーを作る爲でもなく、また所謂藝術寫眞を寫す爲でもない。一言にして盡せば、僕はその器械の光学的な作用をかりて、自然の風物の中に反映されている、自分の心の郷愁が寫したいのだ。」と心象風景との関連を示唆している。また、前橋市を同郷とする詩人であり、萩原朔太郎の研究者でもある伊藤信吉は、「私どもの詩的世界には、カメラアングルと呼ばれるそれぞれの対象把握の窓があり、それが萩原さんにおいて、多少とも詩的表現にかかわりがあった」と述べ写真と詩との関連性について述べている¹¹⁾。

そこで本研究では、我が国の近代詩に大きな影響を与えた詩人である萩原朔太郎が撮影した写真を客観的に捉え直すことにより、彼の風景観について基礎的な知見を得ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 着眼点

萩原朔太郎に関する研究は、詩に登場する動物や植物などのイメージの特徴を西洋の文学や哲学と比較した研究¹²⁾や詩観とメディアとの関連に着目した研究¹³⁾、詩学からアプローチをした研究¹⁴⁾をはじめ、人文分野で広く行われている。一方、近代詩人の中で萩原朔太郎は、研究が多く蓄積されているものの詩史上

*前橋市都市計画部 **群馬工業高等専門学校都市環境工学科 ***前橋工科大学工学部社会環境工学科 ****伊勢崎市企画部 *****㈱文化財保存計画協会

における彼の位置は確定しておらず、作品が理解しがたいとされる。これは客観的考察が十分でないことが原因とされている¹⁵⁾。郷土をはじめ、場所と詩との結びつきは、詩的生命の基本であり人間的気質や情操、思想が、いかに成熟したかを把握することができ、心情的郷土意識と詩的情操に脈絡するとの見方がある¹⁶⁾。

そこで本研究では、萩原朔太郎が撮影した写真をシーン景観の事例として構図と場所の特性を客観的に評価する。そして、萩原朔太郎自身の作品（詩）を重ねることによって、写真と作品（詩）との関連性について検討を行うことを着眼点とする。

（２）研究フロー

本研究が分析の対象とする資料は、前橋市立図書館に保存され、現在においては、前橋文学館で所蔵されており、同館によって写真集としてまとめられた「萩原朔太郎撮影写真集—完全版—」（みやま文庫）に収録される萩原朔太郎自身が撮影を行った114枚の写真とする¹⁷⁾。

研究フローを図－１に示す。研究は、まず114枚の写真の特徴を探るため、計4名の被験者¹⁸⁾が、撮影された写真について1枚ごとに、被写体に捉えられる対象の名称を自由記述により抽出した。自由記述により抽出した名称は、塚本らによる既往研究¹⁹⁾を参考にしながら、KJ法を適用して代表的な123の対象を17の景観要素としてまとめた（表－１）。次に、114枚の写真についての「主対象」及び「視点場」を自由記述によって回答を得た。視点と主対象との上下関係では、「水平」、「俯瞰」、「仰視」の3つの選択によって回答を得た。さらに、114枚の写真に含まれる全ての景観要素を抽出するため、1枚の写真ごとに「対象場」として前述した景観要素に該当すれば「1」を、該当しなければ「0」として回答を得た（３章）。上記の結果については、数量化理論第Ⅲ類を適用して分析を行った（４章－１）。数量化理論第Ⅲ類により、得られた景観要素のカテゴリスコアを解釈することによって軸の意味づけを行った。この軸に撮影した場所別に整理を行ったサンプルスコアを布置し、場所別による景観要素の構成について特性を探った（４章－２）。また、数量化理論第Ⅲ類による分析で得られた景観要素のカテゴリスコアについては、クラスター分析を適用することで類型化し、萩原朔太郎自身が撮影した写真の総体的な特性を探った（４章－３）。さらに、萩原朔太郎の代表する作品（詩）をテキストデータとして用い、形態素解析を適用することで単語の抽出を行い、萩原朔太郎の撮影した写真と作品との関連性について検討を行った（４章－４）。以上の分析結果を踏まえて、萩原朔太郎の撮影した写真についての客観的な特性、及び作品との関連について得られた知見にもとづき考察を行った（５章）。

３．萩原朔太郎の撮影した写真

（１）分析対象

萩原朔太郎が写真とかかわった時期は、自身が16歳から53歳までの37年間であるとされる。分析対象とした写真集において、収録されている最も古い写真は、明治35年（1902年）に群馬県前橋市の生家で撮影された萩原医院の病室新築工事である。撮影写真は、オリジナルプリント18枚、ガラス乾板67枚、フィルムネガ29枚の3種類を原板としている。

撮影時期は、40枚が不明となっているが、それ以外の写真は、9枚が明治時代、50枚が大正時代、15枚が昭和時代であり、撮影年が判明している大正10年から大正15年（1921～1926年）の写真が最も多く29枚である。撮影場所は38枚が不明であるが、撮影場所が明らかな写真では、父の出生場所である大阪府（池田市、八尾市）が4枚、39歳の時に妻の健康のため一時的に転居した神奈川県の鎌倉が22枚となっている。また、晩年の居住地である東京都（千代田区、大田区、台東区、明治神宮）が12枚、出生から38歳まで居住した群馬県前橋市が最も多く37枚、群馬

図－１ 研究フロー

表－１ 17の景観要素

車(6)	自動車	自転車	乳母車	人力車	列車	馬車
動物(3)	犬	馬	鳥			
石(4)	石	石垣	石畳	石造		
水(16)	水際	海	川	湖	沼	水
	湖	水辺	河原	川辺	中洲	砂浜
	池	流れ	波	水路		
岸・崖(6)	岸	崖	斜面	堤防	丘	峠
道(4)	道	坂	路	街路		
橋(4)	橋	吊橋	八橋	棧橋		
建物/街並(16)	建物	建築物	軒	田舎	都	家屋
	階段	戸	村落	厩	窓	屋根
	店舗	家	屋台	小屋		
空(3)	雲	空	天			
樹木/独(7)	木(単)	松	桜	生垣	低木	花
	盆栽					
樹木/群(6)	木(群)	林	河畔林	樹林	森	並木
広場・駅(6)	地面	広場	野外劇場	公園	駅	停車場
田畑・草地(8)	野原	草地	湿原	芝生	田畑	庭
	緑地	平野				
工作物(19)	工作物	橋	電柱	ポスト	壁	機械
	休憩所	煙突	看板	送電線	テーブル	ベンチ
	照明灯	仏像	旗	風船	ブランコ	鳥居
	灯籠					
人(8)	人	大人	子供	着物	帽子	臼
	男女	体				
山(2)	山	島				
交流(5)	交流	遊び	賑わい	商い	お祭り	

県の山間部である榛名湖が1枚となっている。表－２は、114枚の写真について、主対象、視点場、視点と主対象の上下関係、対象場の景観要素の出現について調査の結果を示したものである。調査は、判別に恣意が生じないよう性差、年齢を考慮し4名の被験者に判別してもらった。

（２）主対象と視点場、視点と主対象の上下関係

撮影写真の主対象は、対象場の中で性格を規定し、他の対象を景観的に支配する対象である。主対象は、自由記述で回答してもらった上で、表－１の景観要素に括った（表－２）。3名以上の判別一致率²⁰⁾は比較的に高く95.1%であった。主対象は、「人」と「建物/街並」に各々2名で判別が分かれた写真が2枚あった。原因として、写真を判別する際に、「人」として個体を主対象に捉える被験者と「建物/街並」として総体を主対象に捉える被験者がいることが考えられた。各々2名で判別が分かれた主対象の写真については、「建物/街並－人」と併記した。

主対象の景観要素は、「人（35）」が最も多くを占め、「建物/街並（25）」、「樹木/群（11）」、「山（8）」、「水（7）」、電柱など「工作物（6）」、「橋（6）」、「樹木/独（6）」、「田畑・草地（4）」、屋台などの「交流（2）」、馬や犬など「動物（2）」の写真があった。撮影写真の視点場は、視点近傍の空間の連続性から仮想して、自由記述により、判断してもらった。結果、3名以上の判別一致率

表－2 調査対象写真と評価結果の一覧表

写真 No	撮影 場所	撮影年	原紙	主対象	視点場	視点と 主対象の 関係	対象場の景観要素の出現																	
							車	動物	石	水	崖 崖	道	橋	建物	空	樹木 /独	樹木 /群	広場 ・駅	田畑 草地	工作物	人	山	交流	
1	前橋市	明治35年	ガラス乾板(10.2×12.6cm)	人	庭/敷地	水平	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	1	
2	前橋市	昭和初期	立体写真用ガラス乾板	工作物	高所	水平	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	
3	前橋市	昭和3年	立体写真用ガラス乾板	人	庭/敷地	水平	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	
4	前橋市	大正時代	立体写真用ガラス乾板	人	草地	水平	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	
5	前橋市	大正末期	立体写真用ガラス乾板	動物	道	水平	1	1	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	1	0	1	
6	前橋市	大正時代	立体写真用ガラス乾板	建物/街並-人	道	水平	1	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	
7	前橋市	大正時代	立体写真用ガラス乾板	建物/街並-人	道	水平	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	
8	前橋市	大正時代	立体写真用プリント	建物/街並	道	水平	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	
9	前橋市	昭和初期	立体写真用ガラス乾板	建物/街並	高所	傾斜	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	1	
10	前橋市	大正時代	立体写真用ガラス乾板	樹木/群	道	仰視	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	
11	前橋市	明治末期	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	工作物	道	水平	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	
12	前橋市	大正時代	ガラス乾板(10.2×12.6cm)	建物/街並	道	水平	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	
13	前橋市	明治末期	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	樹木/群	広場	水平	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0	
14	前橋市	明治末期	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	樹木/群	広場	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	0	
15	前橋市	大正11年頃	立体写真用ガラス乾板	人	道	水平	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	
16	前橋市	明治末期	立体写真用ガラス乾板	水	水辺	水平	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	
17	前橋市	明治42、43年頃	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	人	水辺	水平	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	1	0	
18	前橋市	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	樹木/群	水辺	水平	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	0	0	
19	前橋市	大正末期	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	樹木/水	水辺	水平	0	0	0	1	1	0	1	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
20	前橋市	不明	立体写真用ガラス乾板	水	高所	傾斜	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	1	
21	前橋市	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	橋	高所	傾斜	0	0	0	1	1	0	1	0	1	1	1	1	0	1	0	0	1	
22	前橋市	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	動物	対岸	水平	0	1	0	1	1	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	
23	前橋市	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	水	水辺	水平	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	
24	前橋市	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	建物/街並	道	水平	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
25	前橋市	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	田畑・草地	道	水平	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
26	前橋市	大正2.3年頃	ガラス乾板(10.2×7.8cm)	人	道	水平	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	1	0	1	0	
27	不明	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	建物/街並	道	水平	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	1	0	1	0	0	
28	前橋市	大正時代	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	樹木/群	道	水平	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
29	不明	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	水	水辺	水平	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	0	1	0	1	
30	不明	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	建物/街並	道	傾斜	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
31	不明	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	水	道	水平	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
32	不明	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	樹木/群	道	水平	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
33	不明	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	樹木/独	水辺	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
34	不明	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	田畑・草地	高所	傾斜	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	1	0	
35	不明	不明	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	水	水辺	水平	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	
36	前橋市	大正2年	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	人	道	水平	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	
37	前橋市	大正時代	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	人	水辺	水平	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0	
38	前橋市	大正時代	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	人	道	水平	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	
39	前橋市	大正時代	ガラス乾板(8.2×10.7cm)	人	道	水平	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	
40	不明	不明	ガラス乾板(10.5×7.5cm)	人	道	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
41	東京都	大正時代	立体写真用ガラス乾板	樹木/独	道	水平	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	1	0	0	
42	東京都	大正12年	立体写真用ガラス乾板	建物/街並	道	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	
43	東京都	昭和初期	立体写真用ガラス乾板	高所	傾斜	水平	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	
44	東京都	昭和初期	立体写真用ガラス乾板	樹木/独	草地	傾斜	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	1	
45	東京都	大正時代	立体写真用ガラス乾板	交流	道	水平	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	1	
46	不明	大正時代	立体写真用ガラス乾板	交流	庭/敷地	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	1	0	1	
47	東京都	大正15年	立体写真用ガラス乾板	人	ベンチ	水平	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	1	1	
48	不明	大正時代	立体写真用ガラス乾板	建物/街並	道	水平	1	1	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	1	1	0	1	
49	不明	昭和初期	立体写真用ガラス乾板	建物/街並	道	水平	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	1	1	0	1	
50	不明	不明	立体写真用ガラス乾板	建物/街並	道	水平	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0	1	
51	東京都	大正時代	立体写真用台紙付フィルム	工作物	道	水平	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	
52	東京都	大正末期	立体写真用台紙付フィルム	建物/街並	道	水平	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	
53	不明	不明	立体写真用ガラス乾板	樹木/独	高所	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	
54	不明	不明	立体写真用ガラス乾板	建物/街並	高所	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
55	不明	不明	立体写真用ガラス乾板	人	草地	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	
56	不明	昭和初期	立体写真用ガラス乾板	人	駅	水平	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	
57	大塚府	不明	立体写真用ガラス乾板	広場・駅	傾斜	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	
58	大塚府	明治36年	ガラス乾板(10.2×12.6cm)	人	庭/敷地	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	
59	大塚府	明治36年	ガラス乾板(10.2×12.6cm)	庭/敷地	庭/敷地	水平	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	0	0	
60	不明	不明	立体写真用ガラス乾板	建物/街並	庭/敷地	水平	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	
61	不明	不明	立体写真用ガラス乾板	樹木/独	水辺	水平	0	0	1	1	0	1	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	1	
62	不明	不明	立体																					

表－3 数量化理論第Ⅲ類による分析結果

カテゴリ	第1軸	第2軸	第3軸	第4軸
固有値	0.416	0.252	0.167	0.135
寄与率	0.235	0.142	0.094	0.076
累積寄与率	0.235	0.377	0.471	0.547
相関係数	0.645	0.502	0.408	0.367

カテゴリ	第1軸	第2軸	第3軸	第4軸
車	2.157	-2.312	3.980	0.253
動物	2.564	3.630	2.419	2.311
石	0.571	1.754	-1.897	-1.815
水	-1.114	0.871	1.265	-0.619
岸崖	-1.223	1.050	1.391	-1.726
道	0.066	-0.806	-0.092	-0.078
橋	-1.383	0.696	1.479	-3.178
建物/街並	0.488	-1.395	-0.867	-0.163
空	-0.172	-0.554	-0.055	-0.023
樹木/独	-0.372	-0.438	-0.812	0.343
樹木/群	-0.993	0.099	0.111	0.965
広場・駅	1.298	2.686	-1.069	1.675
田畑・草地	-1.014	0.125	-0.147	0.279
工作物	1.273	0.006	-0.540	-0.312
人	1.142	0.368	0.111	-0.786
山	-1.411	0.289	0.445	2.341
交流	2.289	-1.045	2.981	0.785

軸の解釈	自然－都市	日常－余暇	静－動	川辺－山間
------	-------	-------	-----	-------

が90.4%であり、各々2名で判定が分かれたものは無かった。
 視点場は、「道 (43)」が最も多くを占め、「高所 (18)」、「草地 (13)」、「庭/敷地 (9)」、「水辺 (10)」、「砂浜 (7)」の写真があった。
 撮影写真の視点と主対象の関係では、「水平」、「俯瞰」、「仰視」の3つの選択で判別してもらった。3名以上の判別一致率が100%であった。視点と主対象の上下関係の判別結果は、「水平 (88)」が最も多く、「俯瞰 (21)」、「仰視 (5)」の写真があった。

4. 撮影写真の対象場の特徴

(1) 対象場の出現と数量化理論第Ⅲ類による分析

対象場は、前章で示した方法によって設定した17の景観要素について、各々の写真の対象場として確認できれば「1」を記入し、該当しなければ「0」を記入してもらった。調査結果は、被験者4名のうち3名以上の判別が一致したものを有効として採用し、4名が各々2名に分かれた時は判定を棄却した。対象場の出現総数における被験者3名以上の判別一致率は70.23%であった。景観要素別に判別一致率に着目すると、「樹木/独 (92.31%)」、「空 (89.58%)」、「人 (85.51%)」が高い値になったのに対して、「岸・崖 (49.09%)」、「交流 (43.24%)」、「石 (36.92%)」が低い値となった。「岸・崖」、「交流」、「石」の判別一致率が低い値となった原因としては、経年によって写真そのものが劣化していること、景観要素の定義が不明瞭であり抽出に偏りがあること、被写体を個体として細部まで抽出する被験者（例えば道にある転石をカウントするケース）と集合体として捉えることによって細部について抽出しない被験者（道としてカウントし、転石は抽出しないケース）があることが考えられた。

景観要素の中で出現数が最も多かったものは、「空 (86)」となった。また、「樹木/独 (72)」、「道 (62)」、「建物/街並 (59)」、「人 (59)」、「樹木/群 (58)」、「田畑・草地 (54)」、「工作物 (50)」、「水 (36)」、「岸・崖 (27)」、「山 (27)」、「石 (24)」、「交流 (16)」、「橋 (13)」、「動物 (8)」、「車 (8)」という結果となった（表－2）。

さらに、これら景観要素間の関連性について把握することを目的に数量化理論第Ⅲ類を適用して分析を行った。表－3は数量化理論第Ⅲ類による分析の結果について、各々の固有値、寄与率を示したものであり4軸を抽出した後の累積寄与率は0.547であった。

図－2は、数量化理論第Ⅲ類の分析によって得られた第1軸と第2軸について、得られた各々のカテゴリスコアの値を布置したものである。第1軸のマイナス方向は、「山」、「橋」、「岸・崖」、「樹木/群」など、山や樹木など自然に関するカテゴリが付置さ

図－2 カテゴリ別のカテゴリスコアの分布

図－3 撮影場所別のサンプルスコアの分布

れることから、「自然」と意味づけを行った。第1軸のプラス方向は、「動物」、「交流」、「車」が布置しており、人が生活を営む上で必要な機能に関するカテゴリが付置されることから「都市」と意味づけし、第1軸を「自然－都市」と意味づけを行った。

第2軸のマイナス方向は、「車」、「建物/街並」、「交流」といった日常生活に関する景観要素が布置されることから、「日常」と意味づけを行った。第2軸のプラス方向は、「動物」、「広場・駅」など余暇・レクリエーションに関する景観要素が布置されることから、「余暇」と意味づけし、第2軸を「日常－余暇」と意味づけを行った。同様に、第3軸のマイナス方向は、「石」、「広場・駅」など固定したイメージのある景観要素があり、第3軸のプラス方向に「車」、「交流」、「動物」など、動きのあるイメージのある景観要素があることから、第3軸を「静－動」と意味づけを行った。さらに、第4軸のマイナス方向は、「橋」、「石」、「水」など、川辺をイメージする景観要素があり、プラス方向に「山」、「動物」など、山間をイメージするカテゴリがあることから第4軸を「川辺－山間」として意味づけを行った（表－3 参照）。

(2) 対象場の場所別特性の把握

図－3は、数量化理論第Ⅲ類によって得られた写真ごとのサンプルスコアについて撮影場所に分類し、図－2と同様にマッピングを行ったものである。図－2と図－3の結果を重ね合わせることで、萩原朔太郎の写真の撮影場所について以下の傾向を把握することができた。まず、鎌倉を撮影場所としている写真は、第1象限が8枚、第2象限が3枚、第3象限が4枚、第4象限が7枚と全ての象限に広く分布していた。中でも第1象限と第4象限の写真が多くを占めることから、「都市－余暇」と「都市－日常」を捉える対象場を多く撮影した傾向があることが分かった。

次に、前橋市を撮影場所としている写真は、第1象限が3枚、

第2象限が19枚、第3象限が3枚、第4象限が11枚と鎌倉と同様に全ての象限に広く分布していた。中でも第2象限と第4象限の写真が多くを占めることから、「自然・余暇」と「都市・日常」を捉える対象場を多く撮影した傾向があることが分かった。

さらに、大阪府は7枚の全てが第4象限に布置されていることから「都市・日常」、東京都は第1象限に3枚、第3象限に5枚、第4象限に4枚の撮影写真が布置されていたことから、「都市・余暇」と「都市・日常」、「自然・日常」を捉える対象場を撮影した傾向があることが分かった。

この結果から、前橋市や鎌倉の撮影した写真が広い景観要素を捉え、かつ自然と余暇との関わりを捉えた写真が多く存在した。これに対して、東京都や大阪府を撮影した写真では、自然と余暇の関わりを捉えた写真（第2象限）が存在せず、むしろ都市を中心に余暇と日常を捉えた写真が多く存在することが分かった。中でも前橋市では自然と余暇の関わりを捉えた写真（第2象限）が

表-4 分析対象とした作品一覧

No.	作品名	No.	作品名	No.	作品名
1	地面の底の病気の顔	49	作品の底	87	中学の校庭
2	葉の裏	50	閑寂な食欲	88	寂寂亭
3	竹	51	天候と思想	89	二子山附近
4	竹	52	笛の音のする 壁へ行くようす	100	才川町
5	つえたる菊	53	寂さのたふ	101	小浜東渡
6	菊	54	思想は一つの 惑匠であるか	102	新前橋駅
7	簞	55	遠伝	103	大波瀬
8	矢	56	願	104	広瀬川
9	天井竈死	57	空の背後に 隠れては	105	利根の松原
10	井	58	花やかなる情緒	106	公園の椅子
11	殺人事件	59	夢	107	熊沢公園
12	雲雀料理	60	雲雀を讀む	108	大波瀬
13	天眞	61	夢を語る	109	新前橋駅
14	森	62	雨のあふれる	110	小浜松林
15	かなしい遠景	63	冬の雪の光を感じ	111	寂寂亭
16	かなしい月夜	64	内観への鳥影	112	沼津中学
17	かなしい月夜	65	その風景は鳥である	113	湯治亭の歌
18	夢を夢む	66	演義	114	沼津城跡
19	中庭の道草の死	67	夢を夢む 詩集前部	115	乃木坂俱樂部
20	病室内に居る人が病態な 病人に見える理由	68	蜩	116	願
21	夜夜	69	絶望の流涕	117	御車店 祝日
22	あけあけ	70	退散	118	下田駅退任に
23	晴春	71	かつて信仰は 地上にあった	119	告別
24	くさった身体	72	松雲に光る	120	虎
25	7番の妻	73	詩集後部	121	虎
26	紫雲	74	煙やける手	122	虎
27	さびしい人情	75	天候と思想	123	あめ雨に水を模つて
28	雲雀の歌	76	夜夜	124	煙やける手
29	雲雀の詩を念ふ	77	松雲に光る	125	川流
30	見知らぬ犬	78	詩集後部	126	雲雀の詩
31	山に登る	79	雲雀の動物	127	詩集なし
32	田舎を走る	80	眼とある海辺	128	徒ないし朝
33	雲雀の歌	81	眼とある	129	煙やける空間
34	夜夜を走る	82	雲雀の歌	130	雲雀の詩
35	強い闇に抱かる	83	風雨と雲雀の愛	131	雲雀の詩
36	幻の夜室	84	仙郎	132	群衆の手に度て
37	群衆の手を求めて歩く その手は菓子である	85	大波瀬を穿つ	133	雲雀の歌
38	雲雀	86	雲雀の歌	134	手
39	雲雀の花見	87	雲雀の歌	135	沼津川の岸邊より
40	雲雀の川	88	夜々	136	雲雀の歌
41	雲	89	夜	137	文政紀略
42	雲のない歌	90	旗上	138	絶望の裏
43	緑色のかい歌	91	植物	139	虎
44	くさる鳥	92	利根川の川原より	140	拾遺詩集
45	雲雀の歌	93	雲雀の歌	141	雲雀の歌
46	かなしい囚人	94	雲雀	142	雲雀
47	野馬	95	雲雀	143	雲雀
48	さびしい東渡	96	月光と蒲月	144	雲雀

表-5 形態要素解析による関連単語の抽出

分類	合計	分類別キーワード	小計	分類	合計	分類別キーワード	小計
車	13	汽車、列車、夜汽車	13	樹木・群	5	林、森林、並木	5
		バス	29			停留場	4
		大	14	広場・駅	33	公園、湖園	19
		狼	14			堤道	19
		魚	8			草	29
		鹿	8			草むら、草の根	19
		鳥	8			野	10
		蛙	8	田畑・草地	86	田	9
		蝶	6			庭	8
		動物	5			野原	8
		小鳥	4			平野	5
		狼	4			椅子、いす、ベンチ、腐荷	26
		鳥	4			寝	10
石	3	石英、石垣、石造	3	工作物	51	寝	9
		池	22			風船、塙	6
		川、利根川、八潮川、河原	19			手	55
		海岸、海辺	8			心	41
		池	8			我	34
		湖	4			娘、お嬢さん、女性	33
		江	4			ひと、少年、男女	29
		渡止場	3			家	17
		岸、崖、堤防	13			船	13
		高麗、坂	5			障	12
		坂	18			からた	13
		路	6			子供	11
		街路	6			泣	11
		橋	6			眼	10
		都	24			衣	9
		意	19			自分	8
		田舎	7			心臓	8
		鹿角	7			胸	8
		家、家、家、農家	6			腰	7
		扉	5			皮膚	6
		村落	5			わが良	5
		都会	5			手足	4
		監獄	4			目	4
		軒	4			しほ	17
		月、月影、月光、月夜	24			山	11
		裏	12			山脈、山頂、山崖	5
		空	11	山	33	酒場	6
		昔、空間	9			市街、百貨店	6
		果(松葉)、家	27	交流	6		6
		櫻	15				
		竹	13				
		梨	9				
		木	9				
		柳	9				
		松	7				
樹木・独	94						

多く存在するという場所の特性を把握した。

(3) 対象場の総体特性の傾向

図-4は数量化理論第三類によって得られた4軸のカテゴリスコアについて、クラスター分析(ウォード法, クラスター数6, クラスター距離4.435, 累積寄与率0.547)を適用することにより樹形図を作成したものである。図より, 次の6つのグループに撮影写真の傾向を把握することができた。1グループは「車」と「交流」で構成された写真。2グループは「動物」で構成された写真。3グループは, 「石」, 「広場・駅」で構成された写真。4グループは「道」, 「空」, 「樹木・独立」, 「建物/街並」, 「工作物」, 「人」

で構成された写真。5 グループは「樹木 / 群」, 「田畑・草地」, 「山」で構成された写真。6 グループは「水」, 「岸・崖」, 「橋」で構成された写真(図-5 参照)となった。以上によって, 萩原朔太郎が撮影した写真の対象場の総体的な特性を把握することができた。

(4) 萩原朔太郎の作品(詩)と撮影写真の景観要素との関連

前項まで萩原朔太郎の撮影写真についての景観要素の特徴について分析を進めてきた。ここでは, 萩原朔太郎の作品²¹⁾をテキストデータとして扱い, 景観要素との関連性について形態素解析による分析を行った。分析は, 技術情報が公開され, 多くの研究論文で利用されている KH Coder を使用した。形態素解析とは, 文と文章を, 言語が持つ最小単位の列に分割し, それぞれの品詞を判別する作業である。KH Coder では形態素解析器として「茶筌(Cha Sen)」が組み込まれている。新潮文庫の萩原朔太郎詩集に収められた表-4 に示した 146 個の主要な作品をテキストデータとして, 形態素解析を行い抽出された名詞と景観要素のカテゴリに関連する単語を表-5 に示した。結果は, 17 の景観要素のカテゴリに関する単語(名詞)の全てが作品中に存在していた。数に着目すると, 「人(358)」が最も多く, 次に「動物(128)」, 「樹木 / 独立(94)」, 「建築 / 街並(93)」があった。撮影写真の対象場にある景観要素と比較すると, 「動物」については, 作品中の単語に多く存在するが, 撮影写真の主対象として少ない結果となった。また, 「人」, 「建物 / 街並」, 「樹木」(群又は独を含む)については, 写真の主対象や対象場, 作品中の単語ともに多い傾向を把握した。

5. まとめ

(1) 結果と考察

本研究では, 萩原朔太郎の自らが撮影した写真を客観的に分析し, 作品(詩)との関連性について検討したものである。結果について以下にまとめる。

- 1) 撮影写真の主対象, 視点場, 視点と主対象の上下関係について検討を行った。主対象の景観要素は「人」や「建物 / 街並」が多く, 視点場は「道」が多い結果となった。視点と主対象の上下関係では「水平」が多く, 対象場について 17 の景観要素から捉えて検討した結果では, 「空」や「樹木 / 独」, 「道」, 「建物 / 街並」, 「人」が多い傾向を把握した。
- 2) 景観要素間の関連性を把握することを目的として, 数量化理論第Ⅲ類を適用して分析を行い, 累積寄与率が最も大きい第 1 軸と第 2 軸に撮影された場所ごとに区分してサンプルスコアをマッピングした。結果, 前橋市や鎌倉の撮影した写真は, 広い景観要素を捉えて, かつ自然と余暇の関わり捉えた写真が多く, 東京都や大阪府を撮影した写真では, 都市を中心とした日常と余暇の関わりを捉えた写真が多い傾向を把握した。
- 3) 数量化理論第Ⅲ類によって得られた 4 軸のカテゴリウェイトについてクラスター分析(ウォード法)を適用することにより, 萩原朔太郎が撮影した写真の対象場について 6 つのグループに類型化した。これによって, 撮影された写真についての景観要素について総体的な特性を把握した。
- 4) 萩原朔太郎の作品(詩)をテキストデータとして扱い, 景観要素との関連性について分析を行った。結果, 17 の景観要素のカテゴリに関する単語(名詞)を分析対象とした作品の中から抽出することができた。
- 5) 撮影された写真と作品について, 景観要素の出現の傾向を見ると, ともに「人」, 「建物 / 街並」の出現数が多くを占めた。また, 「動物」は作品に多いが, 写真では少ない傾向を把握した。なお, 「人」, 「建物 / 街並」の景観要素を含んで構成される写真の対象場は, 4 グループであり, このグループの写真と詩の強い結びつきが推察された。

(2) 課題と展望

わが国の近代詩に大きな影響を与えた萩原朔太郎の撮影した写真に客観的な評価を加えることによって, 作品との関連性を明らかにすることは, 客観的な考察が不十分とされる萩原朔太郎自身の研究を省みる上で意義があると考えられる。本研究によって, 萩原朔太郎の撮影した写真を客観的な景観要素として検討した結果, 彼の作品(詩)に同様の景観要素が単語として包括的に存在し, さらに作品において多く出現する単語で構成される写真のグループの傾向を見出し, 推察することができた。

一方で, 今回の研究で提示した手法は, 4 名の被験者が KJ 法を用いて評価を行った点や信頼性を 3 名以上の被験者の一致に頼っている点において, 再現性に一定の限界がある。よって, 景観要素の抽出方法, 異なる母集団において方法の検証を継続していく必要がある。さらには, 分析対象とした写真及び作品の景観要素間の結び付きを定量的に把握することにより, より具体的に写真と作品との関連性が把握できると考えるが, 今後の課題としたい。

さらに, 「彼の詩的世界そのものは意外に閉鎖的なものかもしれない。とりわけ「月に吠える」や「青猫」の世界は, それが最初の口語詩らしい口語詩の成果であるという点を除けば, はたしてどれだけ普遍性をもちえているのかいさか疑問なのである。朔太郎の詩の世界には他者がいない。彼の自我を受けとめるべき客体がない²²⁾」という見解もある。このため写真と詩の関連性については, 背景となる社会情勢や基本的思想を十分に加えることも必要であると考えられる。

補注及び引用文献

- 1) 中村良夫(2001): 風景学・実践編: 中公新書
 - 2) 篠原修編(2001): 景観用語辞典: 景観デザイン研究会著, 彰国社, 30-33
 - 3) 羽生冬佳・黒田乃生・高橋正義(2002): 白川村萩町地区における観光行動と観光対象としての集落風景に関する研究: ランドスケープ研究 Vol.65(5), 785-788
 - 4) 青野幸子・加我宏之・下村泰彦・増田昇(2005): 泉北丘陵端部の農村地域における地形特性から捉えた居住者が好む風景魅力の解明: ランドスケープ研究 Vol.68(5), 753-756
 - 5) 平岡直樹(2007): 天竜川沿川における新旧写真比較からみる景観の変容に関する研究: ランドスケープ研究 Vol.68(5), pp.791-794
 - 6) 池田朋子・紺野昭(1993): 文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究: 日本建築学会計画系論文報告集 No.450, 121-130
 - 7) 小野良平(2005): 明治末期以降の山林の変容と「ふるさと」風景観の成立: ランドスケープ研究 Vol.68(5), 411-416
 - 8) 神田圭一・鈴木誠(2002): 夏目漱石の庭園観に関する研究: ランドスケープ研究 Vol.65(5), 389-392
 - 9) 西田正憲(2007): 瀬戸内海における漢文学のまなざしに見いだされた風景: ランドスケープ研究 Vol.70(5), 365-367
 - 10) 工藤豊・小野良平・伊藤弘・下村彰男(2007): 柿の表象表現にみる風景観の変遷に関する研究: ランドスケープ研究 Vol.70(5), 369-372
 - 11) 前橋市教育委員会(1981): 萩原朔太郎撮影写真集: 萩原朔太郎の巻頭言及び伊藤信吉の序文: 上毛新聞社
 - 12) 田中雅史(2001): 萩原朔太郎の動物のイメージと内的体験—D.H. ロレンス, ニーチェとの比較研究: 言語文化研究(8), 1-12
 - 13) 安智史(2008): 萩原朔太郎というメディア—ひき裂かれる近代 / 詩人: 株式会社森話社
 - 14) 米倉巖(2001): 「純情小曲集」の「自序」論—朔太郎の詩学の根拠—: 日本大学芸術学部紀要(34), 31-46
 - 15) 佐藤房儀(1968): 萩原朔太郎研究の問題点: 日本近代文学(第八集)
 - 16) 伊藤信吉(1981): 萩原朔太郎と詩的風土: 上毛新聞社
 - 17) 野口武久編(2009): 萩原朔太郎撮影写真集—完全版—: みやま文庫発行: 朝日印刷株式会社(写真の番号については, 同誌の掲載番号を示している)
 - 18) 被験者は, 19 歳女性と 21 歳男性(共に群馬工業高等専門学校環境都市工学科学学生)各 1 名, 32 歳女性 1 名(景観関係コンサルタント勤務), 40 歳男性 1 名(景観行政)の計 4 名。景観用語等について予め十分な説明を加えた。
 - 19) 塚本俊介・下村彰男・小野良平・熊谷洋一(2001): 「自己形成期における風景」と居住空間の景観評価における関連性: ランドスケープ研究 Vol.64(5), 709-712
 - 20) 判別一致率とは, 4 名の景観要素の判定により出現した景観要素の出現総数によって, 3 名以上の景観要素の総数を除して百分率で示した値。判別精度 50%以下が 17 カテゴリのうち 3 カテゴリであり, 総カテゴリの 8 割以上が判別精度 50%を満たす客観性が確保されると判断した。
 - 21) 河上徹太郎編(2004): 萩原朔太郎詩集: 新潮社
 - 22) 洪沢孝輔(1967): 萩原朔太郎論(一): 一橋論叢 57(2), 198pp
- (2012.3.31 受付, 2012.8.1 受理)